（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　　西沢史仁（にしざわふみひと）

インドにおいて論理学研究はかなり古くにさかのぼる。医学書『チャラカ・サンヒター』等が展開する論理学説をふまえ、３～４世紀には論理学を組織的に大成したニヤーヤ学派が成立した。一方また、初期の大乗仏典に含まれる論理学説をもふまえ、５～６世紀にはディグナーガ（陳那）が仏教論理学を基礎づけた。さらにまたディグナーガ論理学をめぐる仏教内外の論争を念頭に置き、仏教論理学を確立したのが７世紀のダルマキールティ（法称）である。ダルマキールティの論理学の影響はその後のインド仏教、さらには10世紀後半以降の後伝期のチベット仏教においても顕著であった。

西沢氏の論文は、以上のようなインド仏教における仏教論理学の展開をふまえたうえで、それがチベットにおいていかに受容され、新たな発展を見ることになったのかに焦点をあてる。近年公開されたカダム派全書の中には、後伝期の比較的早い時期の貴重な写本が含まれており、とくにチャパ・チューキセンゲ（1109-1169）に代表されるサンプ学問寺系の諸論師による論理学書の発見は大きな注目を集め、本格的な研究が進められつつある。

本論文はこの新出資料を活用しながら、チベットの論理学史をゴク・ロデンシェーラプ（1059-1109）が確立したサンプ系、サキャ派系（13 世紀以降）、およびゲルク派系（14 世紀後半以降）の三つの代表的な系統に分類し、それらの特質を論じた上で、とくに認識手段（プラマーナ）論を中心に考察を進める。論文は第１部「チベット仏教論理学史概観」と第２部「認識手段論の歴史的展開」、および第３部「テキスト校訂、翻訳研究篇」から成る。第３部は新出のチャパ造『論理学意闇払拭』およびサパン造『論理学正理宝蔵』の該当箇所の校訂テキストおよび詳細な訳注研究で、これ自体、国内外を問わず初めての本格的な研究であり、きわめて貢献度の高い成果と評することができる。

全体で４章から成る第１部は、インド仏教論理学と対比して、チベット仏教論理学の特質と展開を考察する。とくに第４章の「後伝期における論理学の伝承」は、新出資料をもとにサンプ系およびサキャ派の教学史を論じるとともに、ゲルク派におけるセラ、デプン、ガンデンの三大寺における論理学説を中心とした教学史を詳説する。本論に当たる第２部は、第 1 章において「認識手段」の定義を詳論し、第２章ではチベット仏教論理学において新たに考察対象となった誤知や憶測等の５つに分類される「非認識手段による知」を、上記の３系統の枠組みのもとに比較考察し、新たな知見をもたらしている。

以上のように、チベット仏教論理学の特質と展開を、新出資料を駆使しながら広い視野から考察した本論文の成果はきわめて大きく、チベット仏教論理学研究における画期的な業績として高く評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述はみられるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値する業績であると判断する。